

佳作

平和の輪を広げて

岩手県盛岡市立仙北中学校二年 木立奏

私が「感動した」と心から思うことができた瞬間は、つい先日のことでした。

私は、今年の八月四日から六日まで盛岡市の中学生の代表として「広島市友好派遣事業」に参加させていただきました。そこで、平和に関する様々な活動を行いました。その中に「平和記念資料館の見学」という活動がありました。今まで学校で原爆について学習する機会はありませんでしたが、実際の写真を見たことはありませんでした。当時の様子を知るとに少しのためらいや不安はありましたが、平和をつないでいくために必要なことだと思い、勇気を出して中へ入りました。

写真を見た瞬間、頭の中が真っ白になりました。こんなことが本当にあったのだろうかと思われませんでした。ひどい火傷を負ってどこが顔かも分

らない人、死体で埋めつくされた道路。被爆者の方が口をそろえて言う「生き地獄」という言葉が脳裏に蘇ってきました。その状況を想像するだけでも涙が出てきそうでした。

その次の日、私たち派遣団は広島市立幟町中学校を訪ねました。その全校平和集会で私は、一生忘れることができない「感動」という瞬間を身をもって感じました。

全校平和集会では、講師の川本先生による「原爆孤児」についての講話が行われていました。家族を失った子供たちは食料難の中、新聞紙や石を口にくわえて亡くなっていたそうです。この話を聞いたとき、私はまた、すぐに現実として受け入れることができませんでした。それほど川本先生の話は、私にとって辛いものでした。ですが、川本先生は私たちへ向けてこうおっしゃいました。とても穏やかな声で。

「生きていける、ということに心から感謝してください。」

「君たちは、これから生きていくことができ、変えていくことができます。」
その言葉を聞いたとき、体中に鳥肌がたちました。

純粹に「感動」しました。あの瞬間こそ、「感動」という言葉で形容するべき瞬間でした。映画やドラマで感じる「感動」とは全くの別物です。あの言葉を聞いたとき、川本先生が心の底から「平和」を訴え、叫ぶ声が聞こえたような気がしました。そして、若い世代である私たちが亡くなられた方々の分まで「平和」を伝えていこうと心に誓いました。

あの研修を終えて帰ってきた今でも、あの時感じた想いは、決して消えることはありません。きっとこれから一年後も、十年後も消えることはないでしょう。あの時感じた「平和」を願い、命をつなぐ「感動」を世界中に広げ、みんなが手を取り合う「輪」をつくっていききたい、と今、心から思っています。